

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成29年8月23日（水）14：30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：田中委員長

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いいたします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。スミさん。

○記者 共同通信のスミです。よろしくお願いします。

委員長の任期があと1ヶ月を切ったかと思うのですけれども、今現在、やり残していることとか、あと1ヶ月の間でこれだけはしなければいけないとか、今の思いがあれば教えてください。

○田中委員長 やり残したこととかいうか、やることはずっと続いていますので、別に特にやり残したことはないと言った方がいいと思いますけれども、これから1ヶ月、いろいろな意味で忙しいですね。皆さんのインタビューも随分たくさんありますし、いろいろな最後の後片づけもありますし、いろいろありますので。そんなところですかね。答えになっていないけれども。

○記者 あと1点、今週末にある茨城県知事選で現職の橋本知事が、東海第二原発については、再稼働は認めないということで選挙の争点になっておりますけれども、委員長としては、東海第二原発について、特に安全上リスクが高いとか、問題があるとかという御認識があるのでしょうか。

○田中委員長 これは東海第二に限ったことではありませんで、私どもとしてのミッションは、一応、我々の求める安全のレベルに達しているかどうかを確認するということになります。ですから、それをどう判断して、稼働するか、しないかということは、それは地域の皆さんとか事業者とか、いろいろな関係があると思うので、それは私どもが何か物を申し上げることではないです。

ただ、東海第二にして一つ特殊な環境条件は、要するに、やはり30キロメートル圏内に県庁所在地が入っているし、100万人近い人口がいるという中で、どういうふうに判断されるかというのは、まさに地域の中での判断が大きいのだらうと思いますけれども。

○司会 ほかに質問のある方はいらっしゃいますか。ヒガシヤマさん。

○記者 朝日新聞のヒガシヤマでございます。

今日の定例会の議題1にもかかわる話なのですけれども、例えば、今日は量研機構の評価がテーマでしたけれども、JAEAもそうですし、いろいろな再処理の後片づけとかもそうなのですけれども、どちらかという世界的な成果というか、新しい技術開発というようなものではなくて、これからどんどん廃炉とかにもなると、地道にミスなく作業していくということの方が重視されていくというフェーズにどんどん原子力は入ってくるのではないかと思いますのですが、にもかかわらず、やはり文科省的な評価では、いかに世界的な開発をしたかとか、そういうことが高く評価されるようなというのは、もう評価軸としてだんだん合ってこなくなっているのではないかと思いますけれども、そういう発言もありましたが、ちょっと改めてお考えはいかがでしょうか。

- 田中委員長 要するに「発見」とか「発明」とかいう言葉であらわされるものが高い評価を得るといような古い考えがあるのですけれども、やはり実際に自分たちが今、おっしゃるように、この世の中で必要とされる科学技術とか、いろいろなことがいっぱいありますよね。特に規制なんかの場合は、今日も申し上げましたけれども、ミッション・オリエンテッドな組織ですから、そのミッションをいかに果たすかということで、役に立つかどうかということが大事なのであって、何かオリジナルなことをやっていますということが価値があるかということ、それは別のところでおやりくださいと時々私も申し上げます。私自身はオリジナルな仕事の方が好きですけれども、そういう判断基準というのはあってしかるべきだと思います。

多分、こういった評価制度ができてもう20年からたっていると思いますが、世の中がどんどん変わっているのに、結局、何か評価して100%達成したとか、120%達成したとか、研究でそんなものが分かるわけがないのですよね、基本的に。特に基礎研究なんかだったら、120%達成しましたなんて言われたって、何を言っているのだから分からないのですよね。だから、そういうところがあるような気がしますがね。でも、今ここで私が何かを言ったからって変わるものでもないから、大変ですねということしかないですね。

実際、昔、原子力機構の所長とか副理事長をやっているところに、原子力機構が毎年受ける評価書、各現場で作ったのがキングファイルでここからこれぐらいまでありました。毎年そういうのを作るとい、その手間暇たるや大変なものですね、大きい組織になると。それを評価するのに1週間もかかりますしね。そういうことが我が国の今の現状だと思います。

- 記者 そういう、何をもって高い評価をするかというのはすごいテーマですし、それはもうメディアとしての役割というのも重要だと思いますけれども、例えば、規制委側として、今も御発言がありました、規制委から何か文科省に働きかけるみたいな、そういう可能性みたいなものはありますか。
- 田中委員長 文科省に働きかけるというよりは、我々として、今日もちょっと申し上げましたけれども、5年たって、今、どういうことができて、どういうことが足りないか

と。それは規制の中身も、いろいろな知見もそうでしょうと。そういうことをきちんと整理して、もう一度そういうものを目指していくという方が大事だと思います。評価のために何かをするという必要は何もないと思いますけれども。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかに質問のある方はいらっしゃいますか。フジオカさん。

○記者 NHKのフジオカと申します。

昨日なのですけれども、東京電力が福島第一原発で凍土遮水壁の完全閉合に向けて最後の作業を始めたのですけれども、改めまして委員長として、この凍土遮水壁の完成に向けて規制委員会としてどのように対応していかれるか、見ていかれるかということをお教えください。

○田中委員長 私というか、規制委員会が今さら言う必要はなくて、1Fの監視・評価検討会で随分議論されてきて、凍土壁というものがどの程度効果があるかどうかということの評価以前に、一応、もうサブドレンで地下水の処理は済んでいるということできていますので、どうですかね。凍土壁に期待していたのは皆さんではないのですか。凍土壁ができれば、もう汚染水問題は全部解決するというふうな報道をずっとされていたと思うのだけれども、最近はそのようなふうには思わなくなったようだけれども、私どもは最初からそういうふうには思っていましたけれどもね。もう少しクールに見ていたと思います。NHKもどうですかね。2ヶ月ぐらいたって完成して、どういう評価になるか、私、楽しみにしています。

○記者 分かりました。ありがとうございます。

○司会 アベさん。

○記者 日本経済新聞のアベです。

ちょっと話は変わるのでございますけれども、来年度の予算で概算要求の提出期限が今月末になっていると思います。ちょっと関連で2つお伺いさせていただきます。

1つが、今年度は人材育成とか、放射線障害防止対策などの予算というのが結構増額していると思いますけれども、来年度、特にそういう予算が必要ではないかというふうにお考えになっている分野というのをまずお聞かせください。

○田中委員長 細かい金額は私も承知していませんが、重要なことは、ことし法律改正をしまして、来年は検査官とか何かの資格制度を広く入れていこうということですから、そのための教育訓練と、サーティフィケーションをどう与えるかということも出てくると思いますので、そこのあたりは広い意味では人材育成ですけれども、すごく大事だと思っています。

○記者 分かりました。関連するのですが、国の財政もずっと厳しい状況が続いていて、予算をすぐ大幅に増加するというのは難しいと思います。そうした状況で、規制庁とし

ては、平成20年度の検査制度の改正などに向けて、人員を増やしたりとか、研修を強化する必要もあると思います。そう考えると、限られた予算の中で規制行政を進めないといけないという面では、業務を一部効率化したりする必要も出てくるだろうと思います。業務の効率化とか、そうした面はどういった分野が考えられるとお考えになりますか。

○田中委員長 まだ規制庁の職員が十分ということではなくて、今回も検査制度とかを改善するのにいろいろ、人事院も含めて、予算当局からもその辺については認めていただいたという段階です。ですから、まだ効率化をしなければいけない。当然、無駄を省くための努力は常に必要ですけれども、今、それほどそれが大きな課題にはなっていないと思っています。ただ、予算も限られているのは事実ですから、そこをいかにうまく使うかということについては常に注意しなければいけないと思っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 今日御質問されたい方は、あと3方ですね。では、ヤマグチさんからお願いします。

○記者 プラッツのヤマグチです。

先日、8月9日にエネルギー基本計画の見直しのために有識者会議を経産省で立ち上げました。そこでは、冒頭、世耕大臣が、現在の基本計画と骨格は変える必要はなかろうということに加えて、事務方が、2015年に策定されたエネルギーミクス、原子力が20～22%を占めるであろうというところも大方変える必要はなかろうというコメントも伺った次第なのですが、現在、稼働しているのは5基ということで、周りの方々の御意見聞くと、20～22%達成のためには大方30基くらい必要ではなかろうかという複数の御意見もあり、そこら辺を鑑みたときに、もちろんポイントとなるのはこちらの再稼働の審査、加えて不透明感があろうと思われる地元了解などがありますけれども、委員長として、その見通しに対して何かお感じになられるところがございましたら、お伺いできますでしょうか。

○田中委員長 エネルギー基本計画は私が何か申し上げることはありませんし、原子力の比率が20～22%ということについても、現段階ではまだ4～5%ですね。許可を得たものが12基動いても、その倍ちょっと、12～13%行くかどうかというところですから、そうたやすい目標ではないと思いますが、今、私どもからその是非を申し上げることではないと思います。全体で考えることですね、エネルギー問題は。

○司会 次、カミデさん。

○記者 フリーランス記者のカミデです。

委員長の残り任期が少ないということで、あえてお伺いします。委員長マターではないのかもしれませんが、この原子力規制庁自体の取材環境についてお伺いしたいと思います。適切なら適切とお答えいただければいいのですが、例えば、中央官庁で経済産業

省はことしの2月末から、全ての執務室が今まで自由に出入りできたのが、完全施錠でほとんど入れなくなって、経産省の記者クラブが4回にわたって申し入れをして、結局、取材も非常にしづらくなった。今まで対応してくれた人もいろいろな口実を設けてしてくれないとか、いろいろ問題になっています。今、どんなところが立入禁止なのかを調べておりましたら、ここ原子力規制庁も立入禁止の一つに入るとカウントしている人もいるのですね。私自身はそんなに深く入り込んでやらなければならないという取材はしたことありませんけれども、一般的な取材環境のあり方として、今のような原子力規制庁のこういう仕組みで問題ないとお考えなのか、あるいはもう少しオープンにして、本来、原子力は情報公開が原則でございますので、その辺との兼ね合いで、もし委員長御自身、何か感じていることがあったら教えていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

○田中委員長 経産省のことは新聞報道で私も承知していますけれども、基本的に、ここ規制委員会、規制庁の全ての公のものは公開になっていますし、議論の過程も公になっているので、それ以外のものを取材したいという意図が、どういう意図なのか分かりませんし、仕事のプロセスの中で、昔、そういう方もおられたみたいですけれども、机の前にこのこと入ってきて、知らない間に資料を持ち去るような人もいたわけですが、そういうことがあると、これはモラルの問題になってくるのですね。ですから、規制委員会や規制庁の中でも、要するに核物質防護みたいな非常に機微なものもありますから、一概にどうこうということは言えないと思います。ただ、いろいろな取材に対しては、きちっとした筋の通ることに対しては、御質問があれば、職員が答えているのではないかと思います。広報を通してお聞きいただければいいと思います。

○記者 補足よろしいでしょうか。委員長、実務についてはあれだとは思うのですけれども、多くの役所、中央官庁は基本的に立入禁止とはしていないところが多いのですね。自由に入って、その中で、駄目なときに駄目ということはありますけれども、そういうことと比べて、もちろん取材させていただけるのですけれども、部屋がこういう形で立入禁止となっていることについては、性格上、セキュリティの問題その他も含めて、これは当然だとお考えでございましょうか。

○田中委員長 普通、常識的な範囲ではないかと思えます。個人のうちにこのこと入って行って、オープンにしろと言っても、これもなかなかできないのと同じで、執務室というのはプライベート空間でもありますから。必要とされる情報というか、公にすべきだということについては、基本的に全部オープンにしているし、必要があれば、求めがあればオープンにするというのが基本的なスタンスです。

何か付け加えることはありますか。

○大熊総務課長 特にございません。やはり規制という観点からいろいろな機微な情報もございまして、執務室については閉めさせていただいた上で、取材については、広報を通して取材いただければきっちりお答えするというところでご

ざいます。

○司会 それでは、最後、ミヤジマさん。

○記者 『FACTA』のミヤジマです。

7月10日の東電の新会長、社長との意見交換は、はたから見ても後味が悪い、何か相互不信が募ったような印象が残っております。残任期間1カ月ではありますが、規制庁のトップとして、はらわたが煮えくり返ったままやめていかれるのか、この1カ月に7つのテーマの1つでも2つでも、もう一回腹を割って話を聞くチャンスを持つべきではないかと私などは思うのですが、小早川さんもこのお盆にはずっと浜通りを行脚していたようですし、あれがここ最近ですと一番残っているのですけれども、委員長としても腹落ちしないままやめることになるのではないかと思います。どうでしょう。

○田中委員長 はらわたが煮えくり返ったのは言葉だけで、別にそれほどでもないのですけれどもね。要するに姿勢を問題にしたわけですね。だから、そのことを反省してきちっとやっていただくということが、私に対してというよりは、福島の人たちに対する誠意だと思うのですよ。そこのところはきちっとやってくださいということは変わりません。もう一回、きちっと腹を割って話をするという機会は、一応、宿題は出していますので、何もないのに、ただ来て話をしましょうというわけにいきませんから、そういう機会があるかもしれないけれども、分かりません。私、後ろが決まっていますから、何とも言えないのですけれども、今の御指摘は今度は肝に銘じておきます。

○司会 よろしいですかね。それでは、本日の会見は以上としたいと思います。どうもお疲れさまでした。

—了—